

## 特集 妊娠糖尿病

### 当院における妊娠糖尿病の管理法

## ③産後の管理

安日 一郎 *Ichiro Yasuhi* (国立病院機構長崎医療センター産婦人科部長)

● key words 妊娠糖尿病／妊娠中の明らかな糖尿病／産褥管理／母乳哺育

### はじめに

妊娠糖尿病 (gestational diabetes mellitus : GDM) は Internal Association of Diabetes in Pregnancy Study Group (IADPSG) によって2010年に提案された国際統一診断基準<sup>1)</sup>によって、「妊娠中の明らかな糖尿病」を除外し「糖尿病に至らない程度の妊娠中の母体高血糖」と再定義された。これによってGDMは、妊娠中、特に妊娠中期以降のインスリン抵抗性の増大を契機に発症した糖尿病より軽症の母体高血糖という概念を確立した。一方、「妊娠中の明らかな糖尿病」には、①妊娠前にすでに発症していたにも関わらず「見逃されていた糖尿病」、②妊娠中の母体耐糖能における生理的变化を背景として発症したより重症の(糖尿病合併妊娠に匹敵する)母体高血糖、さらに③妊娠中に偶然発症した1型糖尿病など、さまざまな病態が存在する<sup>2)</sup>。GDMの産褥管理はきわめてシンプルであるため、本稿ではGDMだけではなく「妊娠中の明らかな糖尿病」の産褥管理についても解説する。

### I. 産褥早期の耐糖能の変化

分娩直後の産褥早期は妊娠によって発現した母体のインスリン抵抗性が急激に消失することが知られている<sup>3)</sup>。そのことは、胎盤が妊娠中のインスリン抵抗性の発現起点に

なっていることを裏付ける根拠ともなっている。胎盤娩出直後から母体のインスリン感受性は妊娠前のレベルに改善するため、耐糖能も劇的に改善する。

### II. 「妊娠中の明らかな糖尿病」の産褥早期の血糖管理

このカテゴリーにはさまざまな病態の糖代謝異常が含まれ、その病態によって管理指針が異なるため、個々の病態に応じて解説する。

#### 1 妊娠前に見逃されていた糖尿病

妊娠前にすでに発症していたにも関わらず、診断されないうまま妊娠し、妊娠中に初めて診断された糖尿病である。2型糖尿病が大部分を占める。日本では妊娠前に診断されている糖尿病よりも、妊娠中の明らかな糖尿病の奇形頻度が優位に高いことが知られている<sup>4)</sup>。糖尿病合併妊娠に関連した先天奇形が発症するのは妊娠のきわめて初期(3～7週)であり、妊娠診断後の管理ではその発症を予防できない<sup>5)</sup>。この「見逃されていた糖尿病」は妊娠初期に的確に診断する必要がある。母体の妊娠前期血糖スクリーニングは、この「見逃されていた糖尿病」の診断が主眼である。妊娠初期に診断した「妊娠中の明らかな糖尿病」は「見逃されていた糖尿病」であり、インスリン療法は糖尿病合併妊娠と同様にほぼ必須であり、特に妊娠中期のインスリン抵抗性の発現以降、妊娠の経過に伴って必要インスリン量